

月夜荒城の曲を聞く

水野豊洲

栄枯盛衰は一場の夢

相思恩讐悉く塵煙となる

星移り物換るは刹那の事

歲月忽々逝いて還らざる

史篇読み続く興亡の跡

弔涙幾回か几前に灑ぐ

今夜荒城月夜の曲

哀愁切々当年を憶う

【作者】 水野豊洲（一八八九〜一九五八年）（明治二十二〜昭和三十三年）。名は嘉蔵、豊洲は号。司法官僚として活躍するかたわら、漢詩に親しみ退官後は作詩に耽った。多くの 作品を残しているが公表するのを好まなかった。漢詩の翻訳もやり吟詠振興に貢献した。年七十歳。

【語釈】 *一場夢：長い歴史の上から思うとほんの瞬間の一夜の夢のようである。
*相思恩讐：互いに敵となり味方となつて戦う。「恩讐」は敵味方。
*星 移：歳月を経る。
*刹 那：きわめて短い時間。つかの間。
*恩 讐：あわただしい。いそがしい。
*史 編：歴史のつづり。
*弔 涙：あわれみ出る涙。
*几：机

【通釈】 栄枯盛衰はほんの瞬間の一夜の夢のようにはかないもので、敵味方に分かれて戦つた事なども今はすべて塵や煙のように消え去つてしまった。

長い歳月に起こつたそれらのことは、瞬間の出来事であり、歳月はあわただしく過ぎ去つて還つてこない。

過去の興亡の跡を史書で読み続けているうちに往事が偲ばれ、幾たびとなく涙が机上に落ちるのである。そして今宵、この「荒城の月」の名曲を聞きながら、ひとしお迫る哀愁に、ことさら当時の事を思いうかべるのである。

【備考】 この詩は土井晩翠作詞 滝廉太郎作曲の名曲「荒城の月」を聞いて、栄枯盛衰のはかなさを詠じたものである。

【参考】 荒城の月

- 1、春高楼の花の宴 めぐる盃かけさして 千代の松が枝わけいでし 昔の光いまいずこ
- 2、秋陣営の霜の色 鳴きゆく雁の数見せて 植うるつるぎに照りそいし 昔の光いまいずこ
- 3、今荒城のよわの月 変らぬ光誰が為ぞ 垣に残るはただかつら 松に歌うはただあらし
- 4、天上影は変らねど 栄枯は移る世の姿 写さんとか今もなお ああ荒城のよわの月